

# 『安樂集』 訳註 (三) 第三大門

齊藤隆信・曾和義宏  
加藤弘孝・永田真隆  
小川法道

## 【凡例】

- ・底本 (底) には大谷大学博物館蔵順藝本 (八〜九世紀) ころに書写された高山寺旧蔵本の敷写本) を用いた
- ・校本には下記の二種を用いた
  - ㊦ 元禄一一 (一六九八) 年刊、義山校本 (佛教大学図書館蔵)
  - ㊧ 宝永元 (一七〇四) 年刊、道章校本 (龍谷大学図書館蔵)
- ・底本では読めないと判断した場合に限って校本を用い、その校記を頭註に示した
- ・異体字はすべて正字に改めた
- ・本文と校記は原則として旧字体とし、現代語訳と訳註は新字体とした
- ・その他、『安樂集』の校訂に関しては『大正新脩大蔵経』四七巻、

および『浄土真宗聖典 (七祖篇)』 (浄土真宗聖典編纂委員会編、一九九二年) を、また書誌に関しては『浄土教典籍目録』 (佛教大学総合研究所編、二〇一一年) を参照されたい

・『安樂集』本文中の経典引用に関しては、内藤知康『安樂集講読』 (永田文昌堂、一九九九年)、及び杉山裕俊『安樂集』の研究』 (大正大学への学位請求論文、二〇一四年) を参照した

第三大門中有四番料簡。第一辯難行道易行道。第二明時劫大小不同。第三明從無始世劫已來、處此三界五道、乘善惡二業、受苦樂兩報、輪迴無窮受生無數。第四將聖敎證成勸後代、生信求往。

第一辯難行道易行道者、於中有二。一出二種道、二問答解釋。

餘既自居火界、實想懷怖。仰惟大聖三車招慰、且羊鹿之運、權息未達。佛訶耶執障上求①菩提、縱後迴向、仍名迂迴。若徑攀大車、亦是一塗。只恐現居退位、嶮徑遙長、自德未立、難可昇進。

①底欠損(元)宝  
「求」

是故龍樹菩薩云。求阿毘跋致有二種道。一者難行道、二者易行道。言難行道者、謂在五濁之世於無佛時求

第三章のなかを四節に分類する。第一節では難行道と易行道について述べる。第二節では時間の単位としての劫に大小の違いがあることを明らかにする。第三節でははるか昔から現在に至るまで、三界・五道において善業と悪業の報いとして楽や苦を受け、果てしなく輪迴を繰り返す、数えきれないほどの生を受けてきたことを明らかにする。第四節では聖敎によつて証明して、後代〔の人々〕に信心をおこし往生することを求めるように勧める。

第一節に難行道と易行道を述べるなかに二つある。一つには二種の道を示し、二つには問答を通して解釈する。

私(道綽)はすでに自ら迷いの境界にいて、実に怖れを抱いている。「なぜなら」釈尊が三車(羊・鹿・牛)によつて三乘(声聞・縁覚・菩薩)をお説きになられ慰め励まされたが、羊鹿(声聞・縁覚)の敎えでは仮の休息であり、いまだ悟りには到達しておらず、仏は声聞縁覚の敎えは上求菩提の障りとなり、たとえ後に菩薩道に転向したとしても遠回りであるとたしなめられたからである。ただちに大白牛車(仏乘)を扱所とする敎えもあるが、ただ怖れているのは、今は不退転には達しておらず修行の道が険しくはるかに長く、自らの徳ははまだ積めず、悟ることは難しいということである。

だから龍樹菩薩は次のように説かれる。「不退転を得るために二種の道がある。一つは難行道、二つは易行道である。難行道とは、

②底「聞」元宝  
③底「傾」元宝  
「顧」

阿毘跋致爲難。乃有多途、略述有五。何者、一者外道相善亂菩薩法。二者聲聞②自利障大慈悲。三者無顧③惡人破他勝德。四者所有人天顛倒善果壞人梵行。五者唯有自力無他力持。如斯等事觸目皆是。譬如陸路前行則苦、故曰難行道。

言易行道者、謂以信佛因緣願生淨土、起心立德脩諸行業、佛願力故即便往生。以佛力住持即入大乘正定聚。正定聚者即是阿毘跋致不退位也。譬如水路乘船則樂。故名易行道也。

問曰。菩提是一、脩因亦應不二。何故在此脩因向佛、名爲難行、往生淨土期大菩提、乃名易行道也。

答曰。諸大乘經所辯一切行法、皆有自力他力自攝他攝。何者自力、譬如有人怖畏生死、發心出家脩定發通、遊四天下、名爲自力。何者他力、如有劣夫信己

五濁の世、無仏の時にあつて不退転を求めるのは困難である。「この理由としては」たくさんあるが、略して五つをあげる。何かというと、一つには仏教以外の教えの有相の善が菩薩の法を乱す。二つには声聞が自らの悟りのみを求めて、菩薩の大慈悲を妨げる。三つには自らを顧みない悪人が他人の勝れた福德を破る。四つに人間界や天界に生まれたという善果に執着するので、人の清浄なる行を破壊する。五には自力のみで他力の助けがない。目についたものだけでもこれらのような理由がある。陸路を前進することは苦難に喩えられるので難行道という。

易行道とは、仏の救いを信じ、浄土に往生したいと願ひ、菩提心を起こして功德を積み、さまざまな修行をして、「そこに」<sup>②</sup>仏の願力が備わつて往生する。仏の願力によつて大乘の正定聚に入る。正定聚とはつまり不退転の位である。水路を船に乗ることは安樂に喩えられるので易行道と名づける<sup>③</sup>と。

問う。菩提は一つだけなので、そのための修行もまた二つあつてはならない。それなのにどうして、この世界で修行し、仏を求めるところを難行道と名づけ、浄土に往生して大いなる菩提を得るところを易行道と名づけるのか。

答える。さまざまな大乘の經典に述べられている一切の行法には自らの力によつて自らを救う教えや他の力によつて他に救われる<sup>④</sup>教えがある。何が自力かといえは、たとえば輪廻をおそれて、発

身力擲驢不上、若從輪王即便乘空遊四天下。即輪王威力、故名他力。衆生亦爾。在此起心立行願生淨土、此是自力。臨命終時、阿彌陀如來光臺迎接遂得往生、即爲他力。

故大經云。十方人天欲生彼國者、莫不皆以阿彌陀如來大願業力爲増上縁也。若不如是、四十八願便是徒設。語後學者。既有他力可乘、不得自局己分徒在火宅也。

第二明劫之大小者、如智度論云。劫有三種。謂一小二中三大。如方四十里城、高下亦然。滿中芥子、有長壽諸天、三年去一、乃至芥子盡、名一小劫。或八十里城、高下亦然。芥子滿中、如前取盡、名一中劫。或百二十里城、高下亦然。芥子滿中、取盡一同前說、方名大劫。或八十里石、高下亦然。有一長壽諸天、三年以天衣一拂。天衣重三銖。爲拂不已、此石乃盡、名爲中劫。其小石大石類前中劫可知。不勞具述。

心出家して禪定を修し、神通力を得て四天下を自由に往來できることを名づけて自力という。何が他力かといえ、非力な人が自身の力をたのみロバに鞭を打つても空に昇らないけれども、もし轉輪聖王に従えば空を飛んで四天下を自由に往來できるようなものである。つまり轉輪聖王の威力を他力と名づける<sup>5)</sup>。衆生もまた同様である。この迷いの世界で菩提心をおこし修行して淨土に往生したいと願うのは自力である。命が尽きようとする時に、阿彌陀如來の光台に迎えられて往生できることを他力という。

だから『無量壽經』に「十方の人天でかの国に往生したいと願うものには、阿彌陀如來の大願業力が必ず強い助けとなる」と説かれる<sup>6)</sup>。もしこのようにならなければ、四十八願は無意味に建てられたものとなる。後学のものに告げる。すでにたよるべき他力があるではないか。「それなのに」自分は自力の分際であると決めつけ、むなしく迷いの世界にとどまってはならない。

第二節に劫に大小の違いがあることを明らかにするとは、『大智度論』に次のように説かれる。「劫に三種ある。一つには小劫、二つには中劫、三つには大劫である。四十里四方の都市があり、その城壁の高さもまた同様である。このなかに芥子粒を満たして、長寿の神々が三年ごとに一粒ずつこれを取り除いていき、芥子粒の尽きるまでの時間を一小劫と名づける。あるいは八十里四方の都市があり、その城壁の高さもまた同様である。このなかに芥子粒を満たして、前のように取り尽くすまでの時間を一中劫と名づ

ける。あるいは百二十里四方の都市があり、その城壁の高さもまた同様である。このなかに芥子粒を満たして、前述のように取り尽くすまでの時間を大劫と名づける。あるいは八十里の石があり、その高さもまた同様である。長寿の神々が三年ごとに天衣で一度だけなでる。天衣の重さは三銖である。これを繰り返して、この石が尽きるまでの時間を名づけて中劫とする。前の中劫の説明と同様に四十里の石と百二十里の石の場合は小劫と大劫である」と。<sup>⑦</sup>と煩わしいのでこれ以上詳しくは述べない。

第三門中有五番。第一明從無始劫來、在此輪迴無窮、受身無數者。如智度論云。在於人中、或張家死王家生、王家死李家生。如是盡閻浮提界、或重生或異家生。或南閻浮提死、西拘耶尼生。如閻浮提、餘三天下亦如是。如四天下死生四天王天亦如是。或四天王天死忉利天生。忉利天生餘上四天亦如是。色界十八重天、無色界有四重天。此死生彼。一一皆遍亦如是。或色界死生阿鼻地獄。阿鼻地獄中死生餘輕繫地獄。輕繫地獄中死生畜生中。畜生中死生餓鬼道中。餓鬼道中死或生人天中。如是輪迴六道、受苦樂二報、生死無窮。胎生既爾<sup>④</sup>。餘三生亦如是。

④「爾」  
「耳」  
⑤「元」  
⑥「金」

第三節の中を五項目に分けて述べる。第一に果てしない昔から現在に至るまで輪廻は極まりなく、数えきれないほど生まれかわり死にかわりしていることを明らかにするとは、『大智度論』に次のように説かれる。「人間界にあつて、ある時には張氏の家で死のように南閻浮提のなかのいたるところに輪廻し、ある時には同じ家に生まれ、ある時には別の家に生まれる。あるいは南閻浮提で死に西拘耶尼に生まれる。閻浮提のように他の〔東・西・北の〕三天下でもまた同様である。四天下で死に四天王天に生まれることもまた同様である。あるいは四天王天で死に忉利天に生まれる。忉利天で死に他の上方の四天に生まれることもまた同様である。色界に十八重の天界があり、無色界に四重の天界がある。ここで死にあちらに生まれる。それぞれ際限ないことはまた同様である。あるいは色界で死に阿鼻地獄に生まれる。阿鼻地獄のなかで死に

是故正法念經云。菩薩化主告諸天衆云。凡人逕此百千生、着樂放逸不脩道。不覺往福侵已盡、還墮三塗受衆苦。

是故涅槃經云。此身苦所集、一切皆不淨。扼縛癰瘡等根本無義利。上至諸天身、皆亦復如是。

是故又彼經云。勸脩不放逸。何以故、夫放逸者、是衆惡之本、不放逸者、乃是衆善之原。如日月光諸明中最、不放逸法亦復如是。於諸善法爲最爲上。亦如須彌山王於諸山中爲最爲上、不放逸法亦復如是。於諸善法爲最爲上。何以故、一切惡法猶放逸而生、一切善法不放逸爲本。

他の治罰の軽い地獄(8)に生まれる。軽い地獄のなかで死に畜生のなかに生まれる。畜生のなかで死に餓鬼道のなかに生まれる。餓鬼道のなかで死に人天のなかに生まれる。このように六道を輪廻して苦樂の二報を受け、生死は限りがない。胎生だけでもこの通りである。その他〔卵生・湿生・化生の三生〕もまた同様である」と。

だから『正法念処經』に次のように説かれる。「教化者たる菩薩は天の神々にこう告げた。〈そもそも人は天界に何度も生を受けて、樂に執着し放逸して仏道を修めない。これまでの福徳が次第になくなっていき、三惡道に再び墮ちてあらゆる苦を受けることがわからないのだ〉(10)と。

だから『大般涅槃經』に次のように説かれる。「この身は苦の集まるところであり、すべてはみな不淨である。拘束され病気になる根本であり、なんの意味も利益もない。上は諸天の身に至るまで、みなまた同様である」と。(11)

だからまた『大般涅槃經』に次のように説かれる。「仏道を修めて放逸にならないように勧める。なぜかといえば、放逸はあらゆる悪の根本であり、不放逸はあらゆる善の源である。太陽や月の光がさまざまなるさのなかで最も優れているように、不放逸もまたこれと同様である。さまざま善のなかで最上である。また須彌山王がさまざま山のなかで最上であるように、不放逸もま

⑤底 欠損元⑤  
「廻」

第二問曰、雖云無始劫來六道輪廻⑤無際、而未知一劫之中受幾身數而言流轉。

⑥底 欠損元⑥  
「千」  
⑦底 「一」元⑦  
なし

答曰。如涅槃經說。取三千大千⑥世界草木截爲四寸籌、以數一劫之中所受身父母頭數、猶自不漸。或云。一劫之中所積身骨、如毘富羅山。如是遠劫已來徒受生死、至於今日猶作凡夫之身。何曾思量、傷嘆已不。

第三又問曰、既云曠大劫來受身無數者、爲當直尔総説令人生厭、爲當亦有經文來證。

答曰。皆是聖教明文。何者。如法華經云。過去不可

たこれと同様である。さまざまな善のなかで最上である。なぜかといえば、すべての悪は放逸より生じ、すべての善は不放逸を根本とするからである<sup>12)</sup>と。

第二にはるか昔から現在に至るまで六道を輪廻して際限がないというけれども、一劫のうちにどれだけの数の身を受けることを流転というのか。

答える。『大般涅槃經』に次のように説かれている。「三千大千世界のすべての草木を取ってきて裁断し、四寸の籌（数を数える棒）にして、それを使って一劫のうちに受ける身のその父母の数を数えても、数えきることはいできない」と。あるいはこうも説かれる。「一劫のうちに〔身を受けて〕飲む母乳は四大海水よりも多い」と。あるいはこうも説かれる。「一劫のうちに受けた身の骨を積み上げると毘富羅山ほどの高さになる<sup>13)</sup>」と。このようにはるか昔から現在に至るまで、むなしく輪廻し、今日に至るまで凡夫の身のままでいる。どうしていままでこれを考え、傷ましいと歎かなかつたのか。

第三にはるか昔から現在に至るまで身を受けたことが数かぎりないと言うのは、ただちに人に〔この世を〕厭う気持ちを抱かせようとして〔自らの考えを〕説くのか、それとも經文に証拠があつて説くのか。

答える。これらはすべて聖教に明文がある。どこかというところ

⑧底「欠損」⑨  
⑩「不」

説久遠大劫有佛出世。號大通智勝如來、有十六王子。各昇法座教化衆生。一一王子各教化六百萬億那由他恒河沙衆生。其佛滅度已來、至極久遠猶不⑧可數知。

何者、經云。総取三千大千世界大地、磨以爲墨。佛言。是人過千國乃下一點、大如微塵。如是展轉盡地種墨。佛言。是人所逕國土、若點不點、盡末爲塵、一塵一劫。彼佛滅度已來、復過是數。今日衆生乃是彼時十六王子座下曾受法教。

是故經云。以是本因縁爲説法華經。涅槃復云。一是王子。一是貧人。如是二人互相往反。言王子者。今日釋迦如來。乃是彼時第十六王子也。言貧人者。今日衆生等是。

法蓮華經』に次のように説かれる通りである。「語ることができないほどの久遠大劫の過去に仏が世にお出ましになられた。大通智勝如來と号され、十六の王子がいた。おの法の座に登って衆生を教化された。それぞれの王子がおのおの六百萬億那由他恒河沙の衆生を教化された。その仏が世を去られてから今日までにはるか久遠の時が流れ、はかりしれない<sup>14</sup>」と。

どういふことかといえは『妙法蓮華經』に次のように説かれる。「ある人が三千大千世界のすべての大地を取って、磨り潰して墨にする。仏が次のようにおっしゃった。へその人が千の国土を通り過ぎて「墨で」微塵のように小さい印をつける。このように次々と「千の国土ごと」に印をつけていき、大地で作った墨を使い果たした」と。仏はおっしゃった。へこの人が通り過ぎた国土の印をつけたところもそうでないところもことごとく磨り潰して塵とし、その一塵を一劫とする。大通智勝如來の滅度より現在までの時間はこれを超えている」と。今日の衆生は十六人の王子のもとでかつて教化を受けていた<sup>15</sup>」と。

だから『妙法蓮華經』に次のように説かれる。「このような因縁があるために『妙法蓮華經』を説くのである<sup>16</sup>」と。『大般涅槃經』にまた次のように説かれる。「一人は王子、一人は貧人だが、この二人はお互い往來した間柄である<sup>17</sup>」と。王子というのは今日の釈迦如來であり、かつての第十六王子である。貧人というのは今日の衆生である。



第四問、此等衆生既云流轉多劫、然三界之中何趣受身爲多。

答曰。雖言流轉。然於三惡道中受身偏多。如經說云。於虛空中量取方圓八肘、從地至於色究竟天、於此量內所有可見衆生、即多於三千大千世界人天身。故知惡道身多。

何故如此。但惡法易起、善心難生故也。今時但看現在衆生、若得富貴、唯事放逸破戒。天中即復着樂者多。是故經云。衆生等是流轉、恒三惡道爲當家。人天暫來即去、名爲客舍故也。

依大莊嚴論、勸一切衆生常須繫念現前。偈云。

盛年無患時 懈怠不精進  
貪營衆事務 不脩施戒禪  
臨爲死所吞 方悔求脩善  
智者應觀察 除斷五欲想

第四にこれらの衆生がすでに多劫にわたり輪廻を繰り返すというが、三界のなかではどこに身を受けることが多いのだろうか。

答える。輪廻を繰り返すといっても、三惡道（地獄・餓鬼・畜生）に身を受けることが専ら多い。『十住斷結經』に次のように説かれる。「虚空のなかに方圓八肘<sup>18</sup>（という限られた空間）を量り取り、閻浮地から色究竟天を貫くその空間内に見られる〔有形と無形の〕衆生の数は、三千大千世界の人天の身よりも多い<sup>19</sup>」と。だから三惡道に受ける身は多いとわかる。

どうしてこのようになるのだろうか。悪い行いは起こしやすく、善い心は生じにくいからである。ここで現在の衆生を見てみると、富貴を得たものは、放逸となり戒を犯しがちである。天界ではまた樂に執着するものが多い。だから『五苦章句經』に次のように説かれる。「衆生は等しく輪廻する存在で、常に三惡道を我が家とする。人間界や天界にはたまに来るがすぐに去っていくので客舎<sup>20</sup>というのである」と。

『大莊嚴論經』によればすべての衆生が常に現在に念を繫けることを勧め<sup>21</sup>る。その偈で次のように説かれる。「若くて患いのない時は、怠けて努力しない。様々な俗事に夢中になり、布施・持戒・禪定をおさめない。死が近づいてきたときによりやく後悔して善をおさめようとする。智者は觀察して、五感による欲望を断

精勤執心者 終時無悔恨  
心意既專至 無有錯亂念  
智者勤捉心 臨終意不散  
不習心專至 臨終必散亂  
心若散亂時 如調馬用磴  
若其鬪戰時 迴旋不直行

五又問曰、一切衆生皆有佛性、遠劫以來應值多佛、何因至今仍自輪迴生死不出火宅。

答曰。依大乘聖教、良由不得二種勝法以排生死。是  
以不出火宅。何者爲二、一謂聖道、二謂往生淨土。  
其聖道一種<sup>⑨</sup>今時難證。一由去大聖遙遠。二由理深  
解微。

⑨底「一」元宝  
なし

是故大集月藏經云。我末法時中。億億衆生起行脩道。  
未有一人得者。當今末法、現是五濁惡世。唯有淨土  
一門、可通入路。是故大經云。若有衆生、縱令一生  
造惡、臨命終時、十念相續稱我名字、若不生者、不

ち切らなければならぬ。普段からつとめはげむものは、命の終  
わる時に後悔しない。心意が集中していれば、錯亂の念はない。  
智者はつとめて心を整えれば、臨終に心が散乱することがない。  
心が集中していなければ、臨終にかならず散乱する。心がもし散  
乱する時は、馬を調教するときの石臼を使うようにしなさい。戦  
鬪のときに旋回するだけで、まっすぐ行くことはない<sup>22</sup>。「ように心  
が散乱することはない」と。

第五に一切の衆生にはみな仏性があり、はるか昔から現在に至る  
まで多くの仏に出会っているはずなのに、どうしていまに至るま  
で、輪廻して迷いの世界を出ることがなかったのか。

答える。大乘の聖教によれば、二種の勝れた教えを得ていながら、  
生死の迷いを取り除かないからである。だから迷いの世界を出な  
いのである。二種とは一つには聖道の教え、二つには往生淨土の  
教えである。この聖道の教えでは今の時代には悟ることは難しい。  
〔その理由は〕一つには釈尊がこの世を去ってはるかな時間が過  
ぎているからである。二つにはその道理は奥深いのに衆生が理解  
できるのはごくわずかだからである。

だから『大集月藏經』に次のように説かれている。「私〔が入滅  
した後〕の末法の時に多くの衆生が修行をして仏道を修めようと  
するけれども、いまだ一人として悟るものはいない<sup>23</sup>」と。まさに  
今は末法であり、実際に五濁にまみれた悪世である。ただ往生淨

取正覺。

⑩底「傷」元金

「復」

⑪底「者」元金

「希」

又復⑩一切衆生都不自量。若據大乘、眞如實相第一義空曾未措心。若論小乘、脩入見諦脩道、乃至那含羅漢斷五下除五上、無問道俗未有其分。縱有人天果報、皆爲五戒十善能招此報。然持得者甚希⑪。若論起惡造罪、何異暴風驟雨。是以諸佛大慈勸歸淨土。縱使一形造惡、但能繫意專精常能念佛、一切諸障自然消除、定得往生。何不思量都無去心也。

土の教えのみが悟りへと通じる道なのである。だから『無量壽經』に次のように説かれている。「一生の間に悪を造り続けたとしても、命終の時に十念相續し私の名を称えて、もし往生しないならば私は正覺を得ません<sup>24</sup>」と。

また一切の衆生は全く自らを思量していない。もし「聖道門のなかで」大乘によるならば、眞如・実相・第一義空を心に留めていない。小乗によるならば、見諦（見道）、修道の位に入り、阿那含・阿羅漢の悟りを得て、五下分結（有身見・戒禁取見・疑・欲貪・瞋恚）、五上分結（色貪・無色貪・掉挙・慢・無明）という迷いを取り除くことは、道俗を問わず、いまだその分際のものはない。たとえば人天に生まれる果報を得たとしても、みな五戒や十善を修めることでこの報いを招いたのである。しかしそのようなことははなはだ稀なことである。もし悪を犯し、罪を造ることについて考えると、「その激しさは」暴風が吹き、突然の豪雨が降るのと同じである。だから諸仏は大慈悲によって衆生を勧め、浄土にすくい取ってくださいなのだ。たとえ一生の間に悪を造っても、ひたすらに心を注いで専ら精進して常に念仏すれば、一切の障りが自然に消え除かれて、かならず往生できる。どうして思量せずに全く浄土に生まれ穢土を去る心をおこさないだろうか。

自下第四引聖教證成勸信求生者、依觀佛三昧經云。爾時會中有財首菩薩白佛言。世尊我念過去無量劫時、有佛出世、亦名釋迦牟尼佛。彼佛滅後有一王子、名

これ以下、第四節に聖教によつて証明して、後代「の衆生」に信心をおこし往生することを求めるように勧めるとは、『觀佛三昧海經』に次のように説かれている。「その時に会座のなかに財首

曰金幢。僣慢邪見不信正法。有知識比丘、名定自在、告王子言。世有佛像、極爲可愛。可暫入塔觀佛形像。時彼王子從善友語入塔觀像。見像相好白言比丘。佛像端嚴猶尚如此。況佛眞身。

比丘告言。王子今見佛像不能禮者、當稱南無佛。還宮繫念念塔中像。即於後夜夢見佛像。心大歡喜、捨離邪見歸依三寶。隨壽命終、由前入塔稱佛功德、即得值遇九百億那由他佛。於諸佛所常勤精進、恒得甚深念佛三昧。念佛三昧力故、諸佛現前皆与授記。從是以來百万阿僧祇劫不墮惡道、乃至今日獲得首楞嚴三昧。爾時王子者今我財首是也。爾時會中即有十方諸大菩薩。其數無量。各説本縁、皆依念佛得。

菩薩がいて、仏に次のように申し上げた。(世尊、過去無量劫に思いを巡らしますに、釈迦牟尼仏という仏が世に出られた。この仏の滅後に金幢という一人の王子がいた。驕慢で邪な考えを持ち、仏の教えを信じていなかった。定自在という優れた比丘が王子に次のように告げた。《世の中には仏の像があり、大変素晴らしいものであります。しばらく塔に入って、仏の形像を観てはどうですか》と。そこで王子は定自在の言葉に従って塔に入って像を観られた。像の相好を見て、比丘に告げた。《仏像ですらこれほどまでに見事である。まして仏の眞身ならば言うまでもなからう》と。

比丘がこう告げた。《王子はいま仏像を見ました。礼拝することができなければ、南無仏とお称えください》と。〔そこで王子は〕宮殿に帰り、塔のなかにあった仏像を一心に念じた。するとその日の夜明け前に夢の中で仏像を見た。大いに歓喜して邪見を捨てさり、三宝に帰依した。寿命が尽きた時、以前に塔に入つて仏〔の名〕を称えた功德によつて、九百億那由他の仏に出会うことができ、諸仏の所で常に懸命に精進して、大変奥深い念仏三昧を得た。念仏三昧の力によつて、諸仏が目の前に現れ、未来に成仏するのであるとの予言を与えた。これ以降、百万阿僧祇劫の間、悪道に落ちることはなく、今日には首楞嚴三昧を獲得した。その時の王子というのは今の私、財首である」と。その時會中には数えきれないほど多くの十方の諸大菩薩がおられた。それぞれが自

⑫ ㊦ 欠損 ㊧ ㊨  
「現在」

佛告阿難。此觀佛三昧是一切衆生犯罪者藥、破戒者護、失道者導、盲冥者眼、愚癡者惠、黑暗者燈、煩惱賊中大勇猛將、諸佛世尊之所遊戲、首楞嚴等諸大三昧始出生處。佛告阿難。汝今善持慎勿忘失。過去未來現在<sup>⑫</sup>三世諸佛、皆說如是念佛三昧。我与十方諸佛及賢劫千佛、從初發心皆因念佛三昧力故、得一切種智。

又如目連所問經。佛告目連。譬如萬川長流有浮草木、前不顧後、後不顧前、都會大海。世間亦爾。雖有豪貴富樂自在、悉不得免生老病死。只由不信佛經、後世爲人、更甚困劇、不能得生千佛國土。是故我說。無量壽佛國易往易取。而人不能脩行往生、反事九十種邪道。我說是人名無眼人名無耳人。經教既爾。何不捨難依易行道矣。

安樂集卷上

らの過去世を説かれたが、みな念仏によって三昧を得ていた<sup>㉔</sup>。

仏が阿難に次のように告げられた。へこの觀佛三昧は一切衆生において罪を犯したものの藥であり、破戒のものを護るものであり、道を失ったものを導くものであり、盲冥のもの眼であり、愚痴のもの智慧であり、暗闇の中にあるものの灯であり、煩惱という賊を打ち破る勇猛な大将であり、諸佛世尊が自在になされる首楞嚴三昧等の諸大三昧の出生する根源である」と。また仏は阿難に次のように告げられた。へあなたはいまよく「念仏三昧を」決して忘れてはなりません。過去・未来・現在の三世の諸仏はみなこのような念仏三昧を説かれる。私と十方の諸仏と現在の一大劫の千仏はみな初めに発心してから念仏三昧の力によって一切種智を得たのである<sup>㉕</sup>」と。

また『目連所問經』に次のように説かれる。「仏は目連にこのように告げられた。へたとえばあらゆる川の流れのなかに浮んでい草木は、前のものは後のものを顧みることなく、後のものも前のものを顧みることはないが、すべて大海で一緒になる。世間もまた同様である。高貴な生まれで富をほしいますことがあつても生老病死を免れることはない。ただ仏の教えを信じないために後世に人として生まれても、大変な困難にあい千仏の国土に生まれることができない。だから私は《無量寿仏國は往生しやすい》と説くのである。そうであるのに人々は修行して往生することができず、かえって九十五種の外道の教えに従っている。私は

このような人を無眼人、無耳人と名づける」と。經典に説かれる教えはこのようになっていいる。どうして難行道を捨てて易行道に帰依しないということがあろうか。  
安樂集卷上

註

(1) 『妙法蓮華經』卷第二譬喻品第三(鳩摩羅什訳)

(2) 『無量壽經』卷上、第十一願(康僧鎧訳)……「設我得佛、國中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覺」(『大正藏』第一二卷、二六八上)

(3) 『十住毘婆沙論』第五卷易行品(龍樹造 鳩摩羅什訳)……「是故若諸佛所説有易行道疾得至阿惟越致地方便者。願爲説之。答曰。如汝所説是憊弱怯劣無有大心。非是丈夫志幹之言也。何以故。若人發願欲求阿耨多羅三藐三菩提。未得阿惟越致。於其中間應不惜身命。晝夜精進如救頭燃。如助道中説菩薩未得至阿惟越致地。應常勤精進。猶如救頭燃。荷負於重擔。爲求菩提故。常應勤精進。不生懈怠心。若求聲聞乘。辟支佛乘者。但爲成己利。常應勤精進。何況於菩薩。自度亦度彼。於此二乘人。億倍應精進。行大乘者佛如是説。發願求佛道。重於擧三千大千世界。汝言阿惟越致地是法甚難久乃可得。若有易行道疾得至阿惟越致地者。是乃怯弱下劣之言。非是大人志幹之説。汝若必欲聞此方便今當説之。佛法有無量門。如世間道有難有易。陸道步行則苦。水道乘船則樂。菩薩道亦如是。或有勤行精進。或有以信方便易行疾至阿惟越致者」(『大正藏』第二六卷、四一上—中)

ただしこれは『論註』からの引用である。  
『論註』……「菩薩求阿毘跋致有二種道。一者難行道、二者易行道。難行道者、謂於五濁之世於無佛時求阿毘跋致爲難。此難乃有多途。粗言言三以示義意。一者外道相修漿反善亂菩薩法。二者聲聞自利障大慈

悲。三者無願惡人破他勝德。四者顛倒善果能壞梵行。五者唯是自力無他力持。如斯等事觸目皆是。譬如陸路步行則苦。易行道者、謂但以信佛因緣願生淨土。乘佛願力便得往生彼清淨土。佛力住持即入大乘正定之聚。正定即是阿毘跋致。譬如水路乘船則樂」(『大正藏』第四〇卷、八二六上)

(4) 『略論安樂淨土義』……「一切萬法皆有自力他力自攝他攝。千開萬閉無量無邊」(『大正藏』第四七卷、二中)

なお、第二大門第三の広施問答にはこの『略論安樂淨土義』の文章がそのまま引用されている(『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第五号、二三頁)。

(5) 『論註』……「又如劣夫跨驢不上。從轉輪王行便乘虛空遊四天下無所障礙。如是等名爲他力。愚哉後之學者聞他力可乘當生信心。勿自局分也」(『大正藏』第四〇卷、八四四上)

また劣夫の譬えは第二大門(『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第五号、二三頁)にも出る。

(6) 『無量壽經』四八願全体の取意。

(7) 『大智度論』卷第五(鳩摩羅什訳)……「劫義佛譬喻説。四千里石山有長壽人、百歲過持細軟衣一來拂拭。令是大石山盡、劫故未盡」(『大正藏』第二五卷、一〇〇下)

『同』卷第三八……「有方百由旬城溢滿芥子、有長壽人過百歲持一芥子去、芥子都盡劫猶不漸。又如方百由旬石、有人百歲持迦尸輕軟疊衣一來拂之石盡劫猶不漸。時中最小者六十念中之一念。大時名劫。劫有

二種、一爲大劫、二爲小劫。大劫者如上譬喻」(『大正藏』第二五卷、三三九中)

(8) 最も重い阿鼻地獄より軽い地獄の総称。

『法苑珠林』卷第七一四生篇……「又如輕繫獄中得具冷煖二風。更互觸身亦名段食。唯上二界無有段食。以彼身輕妙」(『大正藏』第五三卷、八三一中)

『同』卷第八七受戒篇……「如薩婆多論云。趣通五道皆得三歸、除重地獄。自外山間樹下空野海邊輕繫地獄。皆得成歸、無受戒法」(『大正藏』第五三卷、九二六中)

(9) 『大智度論』卷第一六(鳩摩羅什訳)……「菩薩得天眼觀衆生輪轉五道迴旋其中。天中死人中生、人中死天中生、天中死生地獄中、地獄中死生天上、天上死生餓鬼中、餓鬼中死還生天上、天上死生畜生中、畜生中死生天上、天上死還生天大地獄餓鬼畜生亦如是欲界中死色界中生。色界中死欲界中生、欲界中死無色界中生、無色界中死欲界中生、欲界中死欲界中生、色界無色界亦如是。活地獄中死黑繩地獄中生、黑繩地獄中死活地獄中生、活地獄中死還生活地獄中、合會地獄乃至阿鼻地獄亦如是。炭坑地獄中死、沸屎地獄中生、沸屎地獄中死、炭坑地獄中生、炭坑地獄中死、還生炭坑地獄中、燒林地獄乃至摩訶波頭摩地獄亦如是。展轉生其中。卵生中死胎生中生、胎生中死卵生中生、卵生中死還生卵生中、胎生濕生化生亦如是。閻浮提中死弗婆提中生、弗婆提中死閻浮提中生、閻浮提中死還生閻浮提中、劬陀尼鬱怛羅越亦如是。四天處死三十三天中生、三十三天中死四天處生、四天處死還生四天處、三十三天乃至他化自在天亦如是。梵衆天中死梵輔天中生、梵輔天中死梵衆天中生。梵衆天中死還生梵衆天中、梵輔天少光天無量光音少淨無量淨遍淨何那跋羅伽得生。大果虛空處、識處、無所有處、非有想非無想處、亦如是。非有想非無想天中死阿鼻地獄中生。如是展轉生五道中」(『大正藏』第二五卷、一七五中)

(10) 『正法念處經』卷第二八觀天品(瞿曇般若流支訳)……「生於天中樂著放逸不覺退沒死相既至汝當自知於天中退受大苦惱爲癡所害

放逸所誑諸天渴愛墮於地獄戲樂自誑墮於地獄受天樂已後受大苦爲心所惑不厭生死爲愛所欺從苦入苦。比丘如是以是偈頌。呵責放逸諸天子等。貪於五欲。不知厭足。如火得薪。乃至愛善業盡。從天還退。隨業流轉。墮於地獄餓鬼畜生」(『大正藏』第一七卷、一六〇上—中)

(11) 『大般涅槃經』卷第二壽命品第一之二(曇無讖訳)……「此身苦所集、一切皆不淨。扼縛癱瘡等、根本無義利。上至諸天身、皆亦復如是」(『大正藏』第一二卷、三七三中)

(12) 『大般涅槃經』卷第二四光明遍照高貴德王菩薩品第十之四(曇無讖訳)……「云何根深難可傾拔。所言根者名不放逸。不放逸者爲是何根、所謂阿耨多羅三藐三菩提根。善男子、一切諸佛諸善根本皆不放逸。不放逸故諸善根轉增長。以能增長諸善根故、於諸善中最爲殊勝。善男子、如諸跡中象跡爲上、不放逸法亦復如是、於諸善法最爲殊勝。善男子、如諸明中日光爲最、不放逸法亦復如是、於諸善法最爲殊勝。善男子、如諸王中轉輪聖王爲最第一、不放逸法亦復如是、於諸善法爲最第一。善男子、如諸流中四河爲最、不放逸法亦復如是、於諸善法爲最爲最。善男子、如諸山中須彌山王爲最第一、不放逸法亦復如是、於諸善法爲最第一」(『大正藏』第一二卷、五〇六中)

(13) 『大般涅槃經』卷第二二光明遍照高貴德王菩薩品(曇無讖訳)……「復次善男子、菩薩摩訶薩觀諸衆生、爲色香味觸因緣故、從昔無數無量劫來常受苦惱。一一衆生一劫之中所積身骨、如王舍城毘富羅山。所飲乳汁、如四海水。身所出血、多四海水。父母兄弟妻子眷屬、命終哭泣所出目淚、多四大海。尽地草木爲四寸籌、以數父母、亦不能尽。無量劫來、或在地獄畜生餓鬼、所受行苦不可稱計」(『大正藏』第一二卷、四九六中)

(14) 『妙法蓮華經』卷第三化城喻品第七(鳩摩羅什訳)の取意(『大正藏』第九卷二二—二五)。特に以下の部分が該当する。

「佛告諸比丘。乃往過去無量無邊不可思議阿僧祇劫、爾時有佛。名大通智勝如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世

- 尊」(『大正藏』第九卷、二二上)
- 「是時十六菩薩沙彌、知佛入室寂然禪定、各昇法座。亦於八萬四千劫、爲四部衆廣說分別妙法華經。一一皆度六百萬億那由他恒河沙等衆生示教利喜、令發阿耨多羅三藐三菩提心。大通智勝佛、過八萬四千劫已、從三昧起、往詣法座安詳而坐」(『大正藏』第九卷、二五中)
- (15) 『同』……「譬如三千大千世界所有地種、假使有人磨以爲墨。過於東方千國土乃下一點、大如微塵。又過千國土復下一點。如是展轉盡地種墨。於汝等意云何、是諸國土、若算師若算師弟子、能得邊際知其數不。不也世尊。諸比丘、是人所經國土、若點不點、盡末爲塵一塵一劫。彼佛滅度已來復過是數」(『大正藏』第九卷、二二上—中)
- 『同』……「爾時所化無量恒河沙等衆生者。汝等諸比丘及我滅度後未來世中聲聞弟子是也」(『大正藏』第九卷、二五下)
- (16) 『同』……「以是本因緣 今說法華經」(『大正藏』第九卷、二二六下)
- (17) 『大般涅槃經』卷第八如來性品第四之五(曇無讖訳)……「一是王子、一是貧賤、如是二人互相往返」(『大正藏』第一二卷、四一二中)
- (18) 一辺が八肘の正方形、あるいは直径が八肘の円のことか。
- (19) 『最勝問菩薩十住除垢斷結經』(竺佛念訳)……「猶如辟方八肘虚空上下俱等無空缺處、算計其中無形衆生、與四天下衆生共等」(『大正藏』第十卷、一〇〇二中)
- (20) 『五苦章句經』(竺曇無蘭訳)……「三惡道者、是一切衆生之家。暫得爲人、暫得爲天。譬如作客日少、歸家日多」(『大正藏』第一七卷、五四四中)
- (21) 「勸一切衆生常須繫念現前」の箇所を引用とみる場合は『大莊嚴論經』(馬鳴造 鳩摩羅什訳)……「繫心慧無漏、非苦所能修。地獄中苦惱、無有暫樂心。尚無暫樂心、云何得繫念。以無繫念故、不得慧無漏」(『大正藏』第四卷、二七二上)
- (22) 『同』……「盛年無患時、懈怠不精進。但營衆事務、不修施戒禪。後遭重病疾、諸根如火然。臨爲死所吞、方悔求修善」(『大正藏』第四卷、二七一下)
- 『同』……「智者應繫念、除破五欲想。精勤執心者、終時無悔恨。心意既專至、無有錯亂念。智者勤捉心、臨終意不散。專精於境界。不習心專至、臨終必散亂。心若散亂者、如調馬用障。若其鬥戰時、迴旋不直行」(『大正藏』第四卷、三〇二下)
- (23) 『大方等大集經』卷第五月藏分第十二分布閻浮提品第十七(曇無讖訳)……「於我滅後五百年中。諸比丘等。猶於我法解脫堅固。次五百年我之正法禪定三昧得住堅固。次五百年讀誦多聞得住堅固。次五百年於我法中多造塔寺得住堅固。次五百年於我法中鬪諍言頌白法隱沒損減堅固。了知清淨士。從是以後於我法中。雖復剃除鬚髮身著袈裟。毀破禁戒行不如法假名比丘」(『大正藏』第一三卷、三六三中)
- (24) 『無量壽經』十八願と『觀無量壽經』下下品の取意。  
『無量壽經』(康僧鎧訳)……「設我得佛、十方衆生至心信樂、欲生我國乃至十念、若不生者不取正覺。唯除五逆誹謗正法」(『大正藏』第一二卷、二六八上)
- 『觀無量壽經』(璽良耶舍訳)下下品……「或有衆生、作不善業五逆十惡、具諸不善。如此愚人以惡業故、應墮惡道、經歷多劫受苦無窮。如此愚人臨命終時、遇善知識種種安慰爲說妙法教令念佛。彼人苦逼不遑念佛。善友告言。汝若不能念彼佛者、應稱歸命無量壽佛。如是至心令聲不絕、具足十念稱南無阿彌陀佛。稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪。命終之時見金蓮花猶如日輪住其人前。如一念頃即得往生極樂世界」(『大正藏』第一二卷、三四六上)
- (25) 『觀仏三昧海經』卷第九本品(佛陀跋陀羅訳)……「爾時財首菩薩白佛言。世尊、我念過去無量世時、有佛世尊亦名釋迦牟尼。彼佛滅後有一王子名曰金幢、驕慢邪見不信正法。知識比丘名定自在、告王子言。世有佛像衆寶嚴飾極爲可愛。可暫入塔觀佛形像。時彼王子、隨善友語入塔觀像。見像相好白言比丘。佛像端嚴猶尚如此、況佛眞身。作是語已比丘告言。汝今見像若不能禮者、當稱南無佛。是時王子合掌恭敬稱南無佛。還宮係念念塔中像。即於後夜夢見佛像。見佛像故心大歡喜、捨離邪見歸依三寶。隨壽命終、由前入塔稱南無佛因緣功德、恒得



值遇九百萬億那由他佛。於諸佛所常勤精進、逮得甚深念佛三昧。三昧力故諸佛現前爲其授記。從是以來百萬阿僧祇劫不墮惡道、乃至今日獲得甚深首楞嚴三昧。爾時王子今我財首是也。如是等諸大菩薩其數無量。各說本緣依念佛得、如本生經說。（『大正藏』第一五卷、六八九上—中）

(26) 『觀仏三昧海經』卷第九本行品（佛陀跋陀羅識）……「佛告阿難。此觀佛三昧、是一切衆生犯罪者藥、破戒者護。失道者導、盲冥者眼、愚癡者慧、黑闇者燈、煩惱賊中是勇健將、諸佛世尊之所遊戲、首楞嚴等諸大三昧始出生處。佛告阿難。汝今善持慎勿忘失。過去未來三世諸佛。是諸世尊皆說如是念佛三昧。我與賢劫諸大菩薩、因是念佛三昧力故、得一切智威神自在」（『大正藏』第一五卷、六八九下）

(27) 『目連所問經』に該当箇所なし。  
『無量壽經』卷下（康僧鎧訳）……「必得超絶去、往生安養國。横截五惡趣、惡趣自然閉。昇道無窮極。易往而無人。（『大正藏』第一二卷、二七四中）

(さいとう たかのぶ 研究員、仏教学部特別任用教授)

(そわ よしひろ 研究員、仏教学部教授)

(かとう ひろたか 嘱託研究員、非常勤講師)

(ながた まさたか 嘱託研究員、佛敎大学院博士後期課程満期退学)

(おがわ ほうどう 学術研究員、佛敎大学院博士後期課程)